【資料紹介】

桑原文庫蔵『高真院様宝山院様源林院様御詠草写』について

―第二代松江藩主側室「養法院」の和歌事蹟―

山崎真克
（松江工業高等専門学校）

摘　要

本稿で取り上げる島根大学附属図書館桑原文庫蔵『高真院様宝山院様源林院様御詠草写』は、出雲松江藩祖の松平直政（高真院）、二代藩主綱隆（宝山院）、四代藩主吉透（源林院）の詠草を集めたものである。この三者の選択には、綱隆側室の養法院が大きく関与しているものと思われる。それは直政が綱隆の実父であり、吉透は綱隆との間に設けた実子であるからである。母が綱隆室の越前福井藩主松平忠昌娘であった三代藩主綱近（隆元院）の詠草は収められていない。また吉透歌の収集には、自らに先立って亡くなった息子への追善の意図があったようである。よって成立は、吉透没の宝永二年（一七〇五）から養法院没の宝永四年（一七〇七）の間と考えられる。

吉透歌に対する点を「中院殿」（通茂か）に請うたという記述や、直政歌が烏丸光広歌に類似する点などから、当時の歌道家とのつながりを窺い知ることもできる。また、一部の詞書を手がかりとして、詠歌の状況や年次の考察を試みた。こうした内容を持つ本書を通して、養法院の和歌事蹟の一端を明らかにした。

キーワード：松平綱隆、養法院、松江藩、中院通茂

はじめに

稿者は、山陰地域に現存する資料の調査に基づき、これまでにも江戸初期松江藩主周辺の和歌事蹟に関する研究を行ってきた。[1]その資料とは、出雲松江藩第二代藩主松平綱隆撰の『山下水』（河本家稽古有文館蔵）、および『養法院実筆和歌集』（島根県立図書館蔵）である。これらはいずれも綱隆側室養法院の真筆資料であり、養法院を中心に江戸初期松江藩主周辺の和歌事蹟を明らかにする上で大きな意義を有している。

本稿で取り上げるのは、島根大学附属図書館桑原文庫蔵『高真院様宝山院様源林院様御詠草写』である。本書は、出雲松江藩祖の松平直政（高

真院）、二代藩主綱隆（宝山院）、四代藩主吉透（源林院）の詠草を集めたものである。この三者の選択には、綱隆側室の養法院が大きく関与しているものと思われる。直政は綱隆の実父で養法院の実父平賀半助が祐筆として仕えた人物であり、吉透は綱隆との間に設けた実子であることから、いずれも自分と関係の深い藩主の詠草のみを集めたと考えられる。三代藩主綱近（隆元院）の詠草が収められていないのは、綱近の母が綱隆室の越前福井藩主松平忠昌娘であったためであろう。

さらに後述するように吉透歌の収集には、自らに先立って亡くなった息子への追善の意図があったようである。こうした記述に加え、先行表現との比較を行うことで、当時の歌道家とのつながりを窺い知ることもできる。このように、養法院の個人的な感慨を契機として成立した本書を通して、養法院を中心に江戸初期松江藩主周辺の和歌事蹟の一端を明らかにするため、本文翻刻とともに内容の紹介を行うものである。

一　『高真院様宝山院様源林院様御詠草写』の書誌

島根大学附属図書館桑原文庫蔵『高真院様宝山院様源林院様御詠草写』[2]（〇九九・ko二五）は、写本一冊。虫損が存し、のどの部分を中心に判読困難な箇所がある。料紙は楮紙。装訂は仮綴で、表紙は本文共紙。縦二六・六cm、横一八・八cm。表紙左上に打付書きで「高真院様／宝山院様／源林院様／御詠草写」と外題が記される。また右には「筑波も御ちかく見えてたゝ坪のうちにあるこゝちすや／やありてわたし守来りはやのれといへは大ふねに棹さし」とあるが、傍線（墨）により抹消されている。さらに表紙には、現所蔵者の整理番号の他に、「第三門／冊一／函／架8（朱）／號別七三／松江圖書舘」という旧整理番号と思しき貼紙が存する。

蔵書印は、現所蔵の「桑原文庫」（七・八×一・七cm、朱、表紙）、「島根大學圖書印」（三・五×三・五cm、朱、一丁表）、「島大圖書」（一・八×一・四cm、朱。楕円形、21丁表）以外に、「蝸牛庵」（二・九×一・六cm、朱、瓢箪形、1丁表）というものがある。これは、「桑原文庫」の名の由来となった旧蔵者桑原羊次郎氏の号である。[3] 墨付丁数は21丁で、遊紙が後に1丁分存する。本文は一面十行で統一されている。和歌は一首二行書きで、下句は一字下げ、詞書は二字下げで記される。奥書等はなく、書写年次は明らかではない。

二　本書の構成・成立時期

前述の通り、本書は出雲松江藩祖の松平直政（高真院）、二代藩主綱隆（宝山院）、四代藩主吉透（源林院）の詠草を集めたものであり、全153首の和歌が収められている。本書の構成を、本稿末尾の〔翻刻〕において付した通し番号、およびに三者の詠歌数によって示すと以下のようになる。

・「出雲少将直政公御詠歌」（1オ）…1～41（41首）
・「出雲拾遺綱隆公御詠歌」（6オ）…42～93（52首）
・「出雲拾遺吉透公御詠歌」（12オ）…94～153（60首）

但し、吉透歌は94～117（24首）、118～153（36首）の二群に分けられる。その事情および吉透歌収集の意図は、117番歌直後の以下の部分に示されている。（傍線・句読点は私に付した。）

吉透公御存世の中、折々の御詠歌百首餘りも在之。然に、吉透公御

世をはやくさらせ給ふ。養法院様御愁傷のあまりに、此御歌共を被取あつめ、御追善の御為にもと、中院殿御ついかてに御点作御望有しかは、百首余の御詠の内、廿四首御点有し分、且御點のなきをも少々末にあらはす。（15ウ～16オ）

文意の通じにくい箇所も存するが、この部分から、我が子吉透が生前に詠んでいた百首余りの歌を取り集め、追善のために「中院殿」に点を請うたのは養法院であることがわかる。百首余りのうち、点を付された24首を吉透歌としてまず配し（94～117）、点のない歌（36首）もこの部分より後に収載した（118～153）と記されている。

すなわち、本書に収められた吉透歌の収集・配列に養法院が大きく関与しているということになる。さらにいえば、直政・綱隆・吉透三代の詠草を集め、本書の体裁に仕立てたのは、我が子吉透の死をきっかけとした養法院の企画であったと考えられる。

もとより、こうした事情は養法院自身によって記されているわけではなく、これまで取り上げた二点の資料とは異なり、本書の書写も養法院の手によるものでもない。したがって、吉透歌以外の収集や本書全体の企画に養法院が関与していない可能性もあるが、前述の通り三代藩主綱近を除く三者の詠草が収載されている点から、養法院の関与は動かないものと考える。

四代藩主吉透は、在位一年余りの宝永二年（一七〇五）九月に三十八才の若さで死去している。養法院は宝永四年（一七〇七）十二月に亡くなっていることから、本書の成立は宝永二～四年（一七〇五～一七〇七）とすることができる。

三　歌道家のとのつながり―「中院殿」

ところで、前節の引用部分にあった「中院殿」とは、誰であろうか。時期的には、中院通茂（寛永八年〈一六三一〉～宝永七年〈一七一〇〉）、もしくはその嗣子である通躬（寛文八年〈一六六八〉～元文四年〈一七三九〉）と考えられるが、宝永年間の歌壇での立場を考慮すれば、通茂の可能性が高いであろう。

歴代の松江藩主や養法院と、中院家との直接の関わりを示す資料は今のところ見出し得ていない。出雲松平家文書や『雲國侯年譜』（島根県立図書館蔵）を始めとした松平家に関わる資料には、中院家との関わりはもとより、和歌に関する事蹟もほとんど見られなかった。また『国書総目録』によれば、中院通茂の日記が京都大学や東京大学史料編纂所などに現存しているが、未見である。今後とも松平家・中院家双方の資料調査を継続する必要がある。

中院通茂と地方の武家との関わりを示す資料が高橋陽子氏により報告されている。[4]『平昌胤朝臣詠草』は、宝永三年（一七〇六）に通茂より古今伝授を相伝した相馬藩主相馬昌胤の詠草を集めたものであり、「点者中院正二位内大臣源通茂公」とあるように通茂の点が存する。このように、地方の武家が歌壇の指導的立場である歌人から和歌の指導を受ける例もみられるので、松江藩主や養法院と中院通茂との交流があったことは十分に考えられる。

四　先行歌との一致状況

本書の収められた全153首の直政・綱隆・吉透三代の詠草は、歌題・歌語・趣向の面からみても、これまでの和歌の伝統を踏まえた穏当なもの

である。したがって、二句程度が先行表現と一致する例も多く見出せるが、直政および綱隆の歌には、それ以上に表現の一致がみられる例、また先行歌そのものを収めたと思しき例がみられる。

◎直政歌

4　八重霞立もかくさて富士のねのゆきをよそめの花とこそみれ

・黄葉集（烏丸光広）第七羇旅部
（富士）
1246　八重がすみ立ちもかくさでふじの山雪のよそめの桜さく比(5)

34　つく〳〵とおもへはやすき世の中を心となけく我か身成けり

・新古今和歌集巻第十八　雑下
（題しらず）　荒木田長延
1774　つくづくと思へばやすきよの中を心となげくわが身なりけり

◎綱隆歌

54　うき世にはとゝめおかしと春風の散らすは花をおしむ成けり

・月詣和歌集巻第七　雑上
題しらず　円位法師
703　うき世にはとどめおかじと春風の散らすは花ををしむなりけり

（治承三十六人歌合・落花・172、山家集・春・117、宮河歌合・16、玄玉集・593、夫木抄・1527、玉葉集・232）

62　置露のひとつうるひに咲花の千草に匂ふ野邊のはなかな

・新撰和歌六帖第六帖
あきの花　（家良）
2291　おく露のひとつうるひにさく花の千草に匂ふ野べの色かな

81　さてもまた幾代かはへむ世の中にうき身ひとつの置所なし

・新勅撰和歌集巻第十七　雑歌二
（題しらず）　寂蓮法師
1149　さても又いく世かはへむよのなかにうき身ひとつのおきどころなさ

91　秋ならは月待夜半は明石かたさくらにくらすはるの山里

・六百番歌合　春部　遅日
五番　左勝　女房（藤原良経）
129　あきならば月まつことのうからましさくらにくらす春の山ざと
（秋篠月清集・310、夫木抄・1558、題林愚抄・1522）

93　世に朽ぬわかの浦はのもしほ草かきあつむるに袖はぬれけり

・慶運法印集　雑

（述懐）

272　数ならぬわかの浦半の藻塩草かくにつけても袖はぬれつつ

直政歌4と類似する『黄葉集』1246番歌は、烏丸光広の詠作である。『黄葉集』には寛文九年（一六六九）の孫資慶による跋文があり、寛文六年（一六六六）直政没後の成立であるが、詠歌年次はそれ以前で直政が目にした可能性も否定できない。島根県立図書館蔵『高真院様御年譜』（〇九二・八／九七）には「（寛永）二年（一六二五）乙丑／國侯二十五歳／頃聞和歌口決伊勢物語烏丸光廣卿」とあり、寛永十五年（一六三八）の松江入部以前に烏丸光広と交流のあったことが知られる。おそらく和歌の指導を受けていた光広の詠作から学び、極めて類似した歌を詠んだものと思われる。

また直政歌34、および綱隆歌54・62・81は、先行歌そのものと考えざるを得ない。佐藤明浩氏の一連の論考で述べられるように[6]、その場や自己の感慨にふさわしい先行歌を書き付けたものが、詠草中に混入したとも考えられる。以前取り上げた綱隆撰の『山下水』は、『古今和歌集』その他の47首の歌を撰んだものであった。直政や綱隆には、そうした先行歌を撰ぶ意識があったのかもしれない。さらに類似の程度が高く、おそらく影響関係を認めうるであろう綱隆歌91・93の例からも、幅広い歌集に目を通していたことが知られる。

五　詞書による詠歌状況の考察

本書に収められた歌は、一部には詞書が付されているものの、詠歌時の状況や年次を特定できるものはあまりみられない。配列をみても、三者の詠歌とも「初春」（1）・「さくらはな」（2）、「歳旦」（42）・「はるを見しかな」（44）、「朝霞」（94）・「谷鶯」（95）とあるように大まかには四季・恋・雑の順となっているが、必ずしも厳密ではなく、考察の材料とするのは難しい。直政・綱隆・吉透三代の詠草は、本書以外にも出雲市立平田本陣記念館所蔵の画賛・短冊などに存するが、本書と関連する点はみられない。

直政歌29「らんといふ女顔の赤きを見て讀る」、綱隆歌67「最中の夜曇ければ」、吉透歌117「或人琴を弾て聞せ侍りしにおりしも春なりければ」のように、公の歌会などの歌だけではなく、私的な場面で詠まれた歌もみられるようである。

ここでは、ごく一部の詞書を手がかりに、詠歌状況の考察を試みる。取り上げる例は以下の通りである。

◎直政歌

扇之嶋

10　秋きぬとあふきのしまもおのつからたたみ〳〵てよするさゝ波

ぬのさきを見て

23　うなはらに引はへ出る布崎やおりてそ見ゆる今朝の初霜

よめしまにて

28　よめしまによる老の波数々のつもりていまそしらとなるらん

孫の身まかりける時に

31　老か身のまよひのやみもはれかたくなみたや月にかゝるしら雲

出雲森山にて

40　今宵しも塩焼けふりたえはて、うらのとまやに雨のもり山

◎綱隆歌

娘の身まかりける時に

80　さためなきうき世と聞とうらみ有るはるより秋はうつらぬものを

四首の詞書に含まれる地名のうち、三首の地名については『雲陽誌』（黒沢長尚編　享保二年〈一七一七〉成立）、および『角川日本地名大辞典32　島根県』（角川書店　昭和54・7）、『日本歴史地名大系33　島根県の地名』（平凡社　平成7・7）によって確認できる。直政歌23の「布崎」は、宍道湖に面した出雲市園町（旧平田市）にある地名で、『雲陽誌』には「楯縫郡　園（布崎）」の項に「布崎濱　此處に六本松といふあり、俚俗傳て云昔山姥の布をへたりし杭なりと、故に此邊を布崎と申侍」とある。[7] また、直政歌28は宍道湖東端に浮かぶ小島「嫁ヶ島」（松江市袖師町）での詠作であろう。さらに直政歌40の「出雲森山」は、中海・境水道に面する松江市美保関町森山（旧八束郡）を指すと考えられる。付近には、松江藩主が美保神社参拝時に利用したという街道が存する。これらは寛永十五年（一六三八）の直政松江入部以降の歌で、歌の内容からもわかるようにいずれも水辺での作という共通点が見出せる。残る一首の「扇之嶋」は該当する地名が確認できず、詠作状況・年次などは明らかではない。

次に、直政歌31、綱隆歌80についての考察を行う。それぞれ亡くなった孫・娘を悼む歌であるが、これは同じ人物が亡くなったときの詠作ではないだろうか。

直政孫・綱隆娘にあたる人物としては、以下のものが知られる。[8]

・大学（母松平忠昌娘）
　…慶安四年（一六五一）四月三日生。同十日死。
・弁丸（母松平忠昌娘）
　…承応二年（一六五三）五月二十日生。
　　寛文四年（一六六四）二月八日死。
・小次郎（母松平忠昌娘）
　…明暦元年（一六五五）四月六日生。同十六日死。
・津与（母松平忠昌娘）
　…明暦二年（一六五六）十二月十二日生。
　　寛文十二年（一六七二）閏六月十一日死。
・綱近（母松平忠昌娘）
　…万治二年（一六五九）九月二十九日生。
　　宝永六年（一七〇九）十一月十五日死。
・利喜（母養法院）
　…万治三年（一六六〇）六月十二日生。
　　貞享三年（一六八六）十月二十日死。
・清（母養法院）
　…寛文二年（一六六二）三月八日生。同年八月十日死。
・吉透（母養法院）
　…寛文八年（一六六八）七月十六日生。
　　宝永二年（一七〇五）九月六日死。

※直政…慶長六年（一六〇一）～寛文六年（一六六六）
　綱隆…寛永八年（一六三一）～延宝三年（一六七五）

養法院…寛永八年（一六三一）～宝永四年（一七〇七）

綱隆の子（直政孫）のうち、直政在世中に亡くなったのは、大学・弁丸・小次郎である。また綱隆娘の津与は、綱隆在世中（直政没後）に亡くなっている。直政歌31、および綱隆歌80が詠まれたのは、これらのうちの誰かが亡くなった際である可能性もある。調査した資料には綱隆の兄弟も記されており、直政の孫は当然綱隆の子以外にもいたはずで、これらが亡くなった際の可能性も否定できない。

しかし本書の成立に養法院が大きく関与したことを思えば、直政・綱隆の両名とも在世中の寛文二年（一六六二）に亡くなった、清（養法院を母とする）を悼んだ歌と考えることはできないだろうか。

こうした考えの上に憶測を重ねれば、夫綱隆の死後、清に続き利喜を亡くし、今また吉透に先立たれた養法院が、吉透追善のために詠草を収集する際、清を悼んだ歌を含む直政・綱隆の詠草をも取り集めて成ったのが本書であると考えられる。

おわりに

本稿では、綱隆側室の養法院が大きく成立に関与しているものと思われる、島根大学附属図書館桑原文庫蔵『高真院様宝山院様源林院様御詠草写』についての紹介を行った。この資料から、養法院晩年の和歌事蹟をさらに明らかにすることができた。

すなわち、同年生まれの綱隆が延宝三年（一六七五）に亡くなり、約二十年余りの隠居生活を送った後、元禄十一年（一六九八）に綱隆撰の『山下水』（河本家稽古有文館蔵）を、続いて元禄十三年（一七〇〇）に『養法院実筆和歌集』（島根県立図書館蔵）をそれぞれ書写した（前稿では、『養法院実筆和歌集』の撰者が養法院自身である可能性を指摘しておいた）。そして在位一年余りの宝永二年（一七〇五）に三十八才の若さで死去した吉透を悼み、追善のために詠草を取り集め、これに直政・綱隆の詠草を加えて『高真院様宝山院様源林院様御詠草写』を成した。宝永四年（一七〇七）に亡くなる養法院の晩年の悲しみを窺い知ることができる。

なお、本書と同内容と思しき書について、夙に佐太神社（松江市鹿島町）先代宮司の朝山晧氏が「出雲と歌道」と題した一連の論文（『勾玉』創刊号・2・3・4・5・2―2・2―4　昭和12・4～昭和13・6）において紹介されている。『御當家先君御詠草』という書目名で取り上げられたこの書は、歌数や本稿第二節に引用した養法院関与に関する記述に少々異同がみられるものの、やはり直政・綱隆・吉透三代の歌集であり、論文中に引用された和歌も一致している。おそらく佐太神社所蔵の資料であろうが、今のところ調査が及んでいない。今後は、こうした資料との比較を行い、中院家・烏丸家などの歌道家とのつながりをも視野に入れつつ、江戸初期松江藩主周辺の和歌事蹟について検討を進めたい。

〔注〕

（1）拙稿「河本家稽古有文館蔵『山下水』について―江戸初期松江藩主周辺の和歌事蹟―」（『古代中世国文学』22　平成18・6）、同「島根県立図書館蔵『養法院実筆和歌集』について―第二代松江藩主側室「養法院」の和歌事蹟―」（『古代中世国文学』23　平成19・3）。

（2）島根大学附属図書館『桑原文庫目録』（昭和50・7）では総記（19頁）に分類され、「高言蔵様寶山院様源林蔵様御詠草／写　和　1冊」と記載されている。

（3）『島根県歴史人物事典』（山陰中央新報社　平成9・11）に拠る。

（4）高橋陽子氏「古今伝授の地方における昇華―相馬藩主平昌胤朝臣詠草を読みながら―」（『日本文学ノート』27　平成4・1）。
（5）以降、和歌の検索・引用は、『新編国歌大観CD-ROM版Ver.2』（角川書店）に拠る。
（6）佐藤明浩氏「歌合判詞における「古歌なり」をめぐって」（『語文』80・81　平成16・2）、同「歌合に古歌を詠むこと」（『国文学論考』40　平成16・3）、同「「古歌」の再生ということ」（『日本古典文学史の課題と方法』和泉書院　平成16・3）。
（7）引用は、『大日本地誌大系42　雲陽誌』（雄山閣　昭和46・10）に拠る。
（8）島根県立図書館蔵『雲國侯年譜』（〇九二・八／一二四三）、『雲州松平家系譜』（〇九二・八／五六）、『直政公記』（〇九二・八／七）などの資料に拠る。

〔付記〕本稿は、山陰研究センターの山陰研究プロジェクト「山陰地域古典文学資料の公開に関するプロジェクト」（研究代表者：蘆田耕一）による成果の一部である。資料の閲覧・翻刻をご許可下さった島根大学附属図書館に厚く御礼申し上げる。

〔翻刻凡例〕

一、翻刻に際しては、底本に忠実であることを心がけたが、製版・印刷の都合と通読の便宜とを考えて、次のような方針に従った。

1　底本の変体仮名はすべて現行の字体に改めた。

2　漢字については、できるだけ底本の字体を尊重して、印字可能な範囲で字体の再現を試みた。したがって、一つの漢字に関して、いわゆる新字体・旧字体の両方を使い、さらには異体字の類も用いた。字体の使い分けを知る便宜のためであるが、原則としてJIS規格に含まれる字体の範囲に限ったので、必ずしも厳密ではない。

3　和歌には通し番号を伏した。

4　改行は底本のままとし、丁の切れ目を（1オ）（1ウ）のように示した。

5　本文に疑問があり、誤字や脱字・衍字等と考えられる場合は、右傍に（ママ）と注記した。

〔翻　刻〕

高真院様
宝山院様 御詠草写
源林院様　　（表紙）

1　出雲少将直政公御詠歌
　初春のそらにも雪はふりつけと
　子の日の松は色まさりけり

（一行分空白）

2　さくらはな折てかさゝむ野山には
　たれかうえけんいつのよのため

3　白雲にかすみのころもぬきかへて
　いつこのやまを春や行らむ

4　八重霞立もかくさて富士のねの
　ゆきをよそめの花とこそみれ（1オ）

5　ちるさくらおしむ心はわすられて
　またこむはるの花をまつかな

6　するかなるふしの高根は雪消て
　霞たなひくむさしのゝはら

7 花はみな散りつくしけり待空の
木すゑにきなけ山ほとゝきす

8 鹿の音もいまや聞なるやまさとは
秋風こそはさそひきつらむ

9 また見むとおもふこゝろはいさよひの
月になこりのおしき空かな（1ウ）

扇之嶋

10 秋きぬとあふきのしまもおのつから
たたみ〳〵てよするさゝ波

11 秋風のたなひく雲を吹はらひ
そらすみわたる十六夜の月

12 夕されはおきの上かせ身にしみて
軒端にすたくむしの聲〳〵

13 奥山にいまや鳴らむさほしかの
聲さそひくる秋の夕風

14 かへる雁いまはと見しになからへて（2オ）
又秋風のさそひ来てけり

15 いさよひの月を見るにもしれ（ママ）けり
誰かは人の老をのかれん

16 くるゝ秋や木の葉さそひてかへるらん
今朝は梢のまはらなるみゆ

17 曇りてもさすかに空を詠やりて
月にこゝろは秋のよすから

18 山高み木の間のそらに雲晴て
滝にかけさすあきの夜の月

19 時そとて雨降りすさむ秋の夜の（2ウ）
つゆをかことになく虫のこゑ

20 見せはやなこゝろとまらぬ人とても
いかてこよひの月のひかりを

21 かねてより月になれ行心とて
いる名残をそおもはるゝかな

22 月に猶を心そとまるむさし野は
ふけゆくすゑに山の端もなし

ぬのさきを見て

23 うなはらに引はへ出る布崎や
おりてそ見ゆる今朝の初霜（3オ）

24 白妙に置つるしも夜更過て
これやむかしのかさゝきの橋

25 いとはやも晴てはくもる村雨の
空さためなき世にそ有けれ

26 うれしきもつらきこゝろもおろかそと
思ひしまゝに年の暮ぬる

27 妻木こるかへる深山の山もりは
身はこからしにさゆる夜の月

よめしまにて

28 よめしまによる老の波数々の（3ウ）
つもりていまそしらとなるらん

らんといふ女顔の赤きを見て

29 くれなゐのなみたや顔にこほるらん

讀る

なに恋わひておとなしの滝

30 冬の夜はものかなしけに時雨つゝ
むなしきひとの袖やぬれぬる

孫の身まかりける時に

31 老か身のまよひのやみもはれかたく
なみたや月にかゝるしら雲（4オ）

應無所住而生其心

32 すてゝたに此よの外はなきものを
いつれかつゐのすみかなるらむ

無切徳之心

33 堂寺を立んとおもふこゝろこそ
つゐに地獄のすみかなるらん

34 つく〳〵とおもへはやすき世の中を
心となけく我か身成けり

35 月見れはむかしの空もかはらしに
かはるはひとのうき身なりけり（4ウ）

36 花に風月に雲とはおもへとも
なを身のうへに老はのかれし

37 いつとなくあたに過ぬる年月を
我か身ひとつとうらめしきかな

38 うつり行春の桜は紅葉して
きのふの夢も今日のうつゝか

39 心にはつもるとしをもしらねとも
鏡のかけにたつ老の波

出雲森山にて

40 今宵しも塩焼けふりたえはてゝ（5オ）
うらのとまやに雨のもり山

初雁を見て

41 玉章をかけてかいなき雁金の
こゝろつれなき人をうらみむ（5ウ）

（以降空白）

出雲拾遺綱隆公御詠歌

歳旦

42 あら玉の今日の御幸のうらゝかに
つゝく小車いくめくりかも

43 二葉より契りし心すみのえの
なもむつましき相生のまつ

44 こひ〳〵ておもひねにねしかひ有て
一夜もはやくはるを見しかな

45 若草のめつらしきまておもほえて
老さきゆかしころもあるかな（6オ）

46 白妙に雪かとそ見るさくらはな
かすにもたらぬ君かよはひは

47 花さかりけふかあすかと待空の
ふりくらしたる宵の雨かな

48 さかぬよりまた来る春そ待たれける
はなも紅葉も見る人からや

49 山たかみふりさけみれは桜かり

くもかとのみそあやまたれける
50 うらむれてけふのまとひは一入の
色香もふかき花の宴かな（6ウ）
51 うれしさも待もおしむも桜はな
心はひとつこゝろなれとも
52 花さかり見るおりからに君かあたり
おもひにそやれ出雲八重垣
かたへにさふらひける目なしに哥
讀といひけれはよめる
53 よの人におとらさらめや見ぬとても
我もこゝろは花になさなむ
54 うき世にはとゝめおかしと春風の
散らすは花をおしむ成けり（7オ）
55 花はみなさそひ行ともいとせめて
匂ひをのこせ山おろしのかせ
56 七夕を祭る言の葉書絶えす
なかき契りをとりそへてけり
57 今夜こそ千夜を一夜になさはやと
あかすや思ふ星合のそら
58 くもるともこゝろそはるゝ夜もすから
空さためなし有明の月
59 時も日もけふそ来にけり幸種の
松も色そふいさよひの月（7ウ）
60 世の人は逢夜千世にとおもひ草
われは葉すゑの露の間もかな
61 色ふかき若紫のふちはかま
萬代までも匂へとそおもふ
62 置露のひとつうるひに咲花の
千草に匂ふ野邊のはなかな
63 我かこゝろなにゝたとへんもしほ草
筆のかきりを書つくしたふ
64 名も高き秋の最中の月の色に
君かなかめはひかりをそ添ふ（8オ）
65 たのめこしちかひも今宵あらはにて
すゑはさえ行仲秋の月
66 有明のはるゝことなき夜半なれと
こゝろも清きなかめなりけり
最中の夜曇ければ
67 幾秋もめくりあはむとおもへはや
月見ぬ夜半もさしてうらみむ
68 ひとへならすこゝろそ深き菊月の
雲のあなたにすめるとおもへは
69 待ほとにおもはせふりか長月の（8ウ）
見えつかくれつほのめかしてや
70 長月の長き夜そへて君か代を
老せぬ秋のかきりなけれは
71 長月のなかき夜すから君か代を
なをなかかれといのりけるかな
72 とことはにおもひ消ねは見ても更に
めつらしからぬ富士のしら雪

73 みよしのをおとに聞つゝおもひきや
　また見ぬひとのいと恋しとは
74 いとせめてつれなき色もはてしかな（9オ）
　一くたりたにさらにそめねは
75 ものをおもふねさめかちなる我宿の
　おりしりかほに時雨そめけり
76 逢見てはいまをしのはむつらきさへ
　なか〳〵なりしものおもひなり
77 我こゝろうつりもますかますかゝみ
　けにおもかけのみなれそなれて
78 ひとりねはせめてこゝろもなくさまむ
　君まさぬ夜は月もやとさし
79 たのみなき身はいかにせんたのまれぬ（9ウ）
　君かこゝろをたのむたのめは
　　娘の身まかりける時に
80 さためなきうき世と聞とうらみ有る
　はるより秋はうつらぬものを
81 さてもまた幾代かはへむ世の中に
　うき身ひとつの置所なし
82 あさましや浅間の山のもえぬにも
　むねのけふりのたゝぬひそなき
83 ことわさもなくていくらの年月を
　夢と過せはあたらひとの世（10オ）
84 待ことのあらしとおもひしこゝろかは
　花ほとゝきす月雪はなそ

85 八雲たつ出雲八重垣へたつれと
　おなしこゝろに花をこそ見れ
　　人にかはりて讀る
86 今宵こそ身はへたちつれ東路の
　こゝろはおなしなかめ成るらん
87 見るもなをまつこゝろなき桜花
　散りなむことをかねておもへは
88 思ひ立月にそ見つる若の浦に（10ウ）
　はれてのとけき波の夕霧
89 ひとゝせにつれてふりにしあすからは
　身もあら玉のあたらしき春
90 月花を幾春秋になかめまし
　色香ときはのおなしこたへに
91 秋ならは月待夜半は明石かた
　さくらにくらすはるの山里
92 たらちねの親のおしへの言の葉を
　かきとゝめてそ世々に傳ゆる
93 世に朽ぬわかの浦はのもしほ草（11オ）
　かきあつむるに袖はぬれけり（11ウ）

（以降空白）

　　出雲拾遺吉透公御詠歌
　　朝霞
94 あさひかけさすやうら漕船もいま

遠近わかすかすむころかな

谷鶯

95 さきぬへき花を待とやたにのとを
また出やらぬはるのうくひす

闕寒

96 山里はけさもあらしのさえ〳〵て
こそのかたみの残るしら雪（12オ）

惜暮春

97 なれて見し花をそおもふ行春の
わかれもおしきけふの夕暮

更衣

98 なれきつる花色ころも今日ははや
かふるたもとにかせそまたるゝ

新樹

99 きのふまてあかすなれみし花の木も
青葉にしける色そすゝしき

卯花（12ウ）

100 すむ月のかけかとそ見る逢かたの
里のかきねにさける卯の花

待時鳥

101 待にねぬこゝろをしらはほとゝきす
夜ふかきそらに一こゑもかな

五月雨

102 いつよりか月にもうとくすきのかと
明くれはれぬさみたれの比

夏暁

103 窓くらき竹のふしとのあけかたも（13オ）
ちかつくかせのをとそすゝしき

夏月

104 まち出て見るほともなく澄月の
明るそおしき夏の夜のそら

蛍

105 くるゝ野に草の葉ことに置露の
光りも見えてほたるひの影

水邊蛍

106 なかれ行水にもきえぬおもひとや
もえてほたるの身をこかすまて（13ウ）

野萩

107 えならすといまをさかりとみやきのゝ
露のたまぬく秋はきの花

薄

108 夏に来て立とまれとか花すゝき
秋野ゝ風にひとまねくらむ

鹿

109 秋風につれなきつまを恋侘て
うらみにたえすしかのなくらむ

籬菊（14オ）

110 咲にほふまかきはいまもさかりそと
見るにえならぬしらきくの花

枯野

111 いろくに秋見し草はかれはて、
霜に色なき野邊のさひしさ
夕千鳥
この夕邊あともなきさの濱千鳥
鳴音はかりそとをさかけ（ママ）ゆく
山雪
112 ふみ分てかよふ人しもあらしやま（14ウ）
あらしも絶て雪そつもれる
雪埋竹
113 夢さます葉分のかせのおとかへて
聞なれぬ竹のゆきのしたをれ
見恋
114 海士をふねほのかにこれと見しひより
袖にはやかて波そかけゝる
湖水
115 船出せんこともかたゝのうらさむみ
夜るのほとにやこほりとつらむ（15オ）
或人琴を弾て聞せ侍りしに
おりしも春なりけれは
116 妙なるやなさけを添て君かいま
弾いたす琴の聲もうらゝに
吉透公御存世の中折々の
御詠歌百首餘りも在之然に
吉透公御世をはやくさらせ給ふ
養法院様御愁傷のあまりに此
御歌共を被取あつめ御追善の
御為にもと 中院殿 御ついかてに（15ウ）
御点作御望有しかは百首余の
御詠の内廿四首御点有し分
且御點のなきをも少々末に
あらはす
（一行分空白）
夕鶯
118 うつるをも我のみうしと夕はえや
梅のさえたにうくひすの鳴
池藤
119 名にしおはゝ池の藤波朝な〳〵（16オ）
うけて匂ひを袖にとゝめや
擣衣
120 月かけにあかぬ心はしたはるゝ
ぬしはたれそよころも打聲
契恋
121 結ふから我はまことのことの葉に
ひとのこゝろは秋そ来にけり
別恋
122 優（ママ）き人をとめぬはかりかなみた川
わかものからにしからみそなき（16ウ）
田家時雨

123 とひなれし月たにうとく小山田の
鹿は夜寒にうち時雨つゝ

寒中千鳥

124 さゆる夜の月もはるかに沖津波
たつに千鳥の鳴さわくなり

歳暮

125 花さかり待しはかりを間遠にて
うつるもはやきとしのくれかな

鶯（17オ）

126 春といへと岩間こほりて鶯の
またうちとくる聲そまれなる

雨中郭公

127 遠近のあやめもわかぬ五月雨に
なくやなみたのやまほ（ママ）ときす

蓮

128 かせそよく夕へやすゝしき蓮葉の
音せてこゆる池のさゝ波

夏の夜

129 村雨の聲をのこして夏の夜の（17ウ）
軒端にすくるかせのすゝしき

夏山

130 庵なくもすむへきかたやなつ山の
しけりあひたる木々の下影

泉

131 立よりて結ふ清水のころも手に
露置そめて秋風やふく

残暑

132 いとしけくならすあふきの内にしも
なとかよはぬや秋の初風（18オ）

田家之秋風

133 はたさむみ小田もる庵の夜とても
重ねぬそてに秋かせのふく

露

134 いつよりも通ひそめてし秋の夜の
月のやとり里（ママ）の小野ゝしら露

虫聲幽

135 おともなくあるゝ霜夜の浅茅生の
うらむるむしの聲もかすかに

古郷月（18ウ）

136 とひなれし床はむかしに荒はてゝ
朝日にやとるふるさとの月

擣衣

137 夜をさむみともに飛（ママ）出て露霜に
なれつゝ賤のころも打聲

菊

138 秋経ても老せぬ友と宮人の
かさしてにほふしらきくの花

契空恋

139 荒磯にひろへるかひもなき海士の（19オ）
いたつらにのみぬるゝ袖かな

140 途中契恋
おもほえす逢見しまゝに契りては
ことの葉残るみちしはの露

松風
141 とにかくにものゝかなしき夕暮は
なれし軒端の松風もうし

波
142 村千鳥むれいるひまもあらし吹
音もはけしき須磨の浦風（19ウ）

夕滝
143 長閑なる夕日のかけのうつろひて
波も色ある瀧のしら糸

海上之霞
144 いせのうらや行かふふねの数々も
かすめる波に道まよふらし

七夕雲
145 織女のまれなる今宵たのみきて
さそなわかれをうきくもの■（出根）

山家雪（20オ）
146 通ひこむひともあらしも音絶えて
深山すみうき雪の夕くれ

鹿
147 さひしさを青葉のかけに打添て
夕山かつのさほしかの聲

枯野
148 いろ〳〵の秋に満つるこゝろしも
今はかれのゝ霜のした草

寄竹祝
149 色かへぬ青葉の竹のよをかさね（20ウ）
君かよはひのたねとなるらし

花の比過行をおしみて
150 なれ来にし花のわかれをさるともと
おしむになをも夕くれの空

河邊之花
151 行水の深きこゝろをせきいれて
見る河野邊の花のさかりを

池上月
152 うろくつも梢にのほるおもかけも
汀の池の月の夜すから（21オ）

夏月
153 夕立の晴行まゝに潰潦
すむ月かけもうつるすゝしき（21ウ）

（以降空白）

A reprinting and explanation of Kōshin'in-sama-Hōzan'in-sama-Genrin'in-sama-Goeisō-no-utsushi in Kuwabara Bunko

YAMAZAKI Masakatsu
(Matsue College of Technology Department of Humanities Associate Professor)

〔Abstract〕

Kōshin'in-sama-Hōzan'in-sama-Genrin'in-sama-Goeisō-no-utsushi in the possession of Shimane University Library, Kuwabara Bunko is a collection of Japanese poem of first generation feudal lord of Izumo Matsue clan Matsudaira Naomasa (Kōshin'in), second generation feudal lord Tsunataka (Hōzan'in), and forth generation feudal lord Yoshitō (Genrin'in). It seems Tsunataka's concubine Yōhōin was greatly involved in a selection of these three people, because Naomasa is father of Tsunataka, and Yoshitō is son of Tsunataka and Yōhōin. Japanese poem of third generation feudal lord Tsunachika (Ryōgen'in) is not included because his mother is Tsunataka's concubine, Echizen Fukui feudal lord Matsudaira Tadamasa's daughter. Also for the memorial of the son Yōhōin collected Japanese poem of Yoshitō who had died. Therefore, this collection of Japanese poem is approved between Yoshitō's death in the year Hōei two (1705) from Yōhōin's death in the year Hōei four (1707).

Yōhōin requested to Nakanoin (Michishige) the evaluation of Yoshitō's poem. And Naomasa's poem is similar to Karasumaru Mitsuhiro's. Thus, Yōhōin and Izumo Matsue clan was connected to the leader of Japanese poem in Kyoto. Also, I examined the situation and period of the creation of Japanese poems through kotobagaki notes. And I made clear a part of the achievement concerning Japanese poems of Yōhōin.

Keywords : Matsudaira Tsunataka, Yōhōin, Matsue clan, Nakanoin Michishige